

宇治拾遺物語論

—表現性とその位相—

竹村信治

一 はじめに

宇治拾遺物語の表現に関する考察は、近年著しく進展している。ここでは、成立論・伝承系統論に向けての類話比較作業を通じて見出された特徴を指摘するといった従来の範囲をはるかに越えて、作品の表現そのものが検討の対象に据えられ、表現性の有り様、表現の成り立っているしくみ、表現形成の内実といった点が、解明されるべき課題として掲げられる。まさしく、「表現論」と称するにふさわしい、本格的な議論の幕開けと評してよいだろう。小論は、かような表現論的考察の現在状況を踏まえつつ、この作品の表現位相を見定めるための手がかりをもとめて、いささかの検討を試みようとするものである。

二 研究史の素描

宇治拾遺物語に関する近年の表現論的考察として小論の視野にあるのは佐藤晃・荒木浩・小峯和明・森正人の四氏の論考^{注1}だが、これらの自覚的な考察に共通しているのは、表現の特性を明確にするために、作品を「一個の自律的な表現体」^{注2}「所与のエクリチュール」^{注3}として読み解くことを「一先ず」の方法としている点である。伝存作品との依拠関係の認定を求めこの上ない厳密さをもってなされる説話集相互の類話比較は、結局のところ今は伝わらない「共通源泉」を書承の依拠文献に想定することで終わる。しかも、「共通源泉」自体、比較される説話集の組み合わせに応じて多面的な相貌をあらわし、したがって「宇治大納言物語」の名を持ち出すことにどれほどの有効性があるのか疑わし

く、詮ずるところ、そのような引き算の答えに作品固有の表現を論ずるための材料を求める方法の危うさだけが明らかになる。とすれば、説話集の研究は、もう一度作品そのものを対象に据えなおすよりほかないだろう。作品を「一個の自律的な表現体」「所与のエクリチュール」として読み解くことを「一先ず」の方法とするとの、いくぶん戦略的な物言いは、かような宇治拾遺ひいては説話集研究の方法論的な閉塞状況についての判断を前提とし、直接的には、昭和五十年代の小峯和明・森正人両氏による今昔物語集研究の方法論の開拓とその成果^{注4}に学んだものと観察される。

作品の表現性を、作品を「読み解く」ことを通して窺う方法は、表現の成立を「読み」のうちにこそ認める作品論の立場との関係を思わせる。また、その方法の有効性を確認するなかで説かれる「開かれた物語空間」としての作品認定は、「読書論」^{注5}とのかかわりを考えさせもする。たしかに、かような方法論提唱の背景にはそれらの影響があったにちがいない。しかし、この方法の選択は、一方で、作品表現の生成の要因を実体的に説明しようとする考察が導いたものでもあった。その意味で、近年の表現論的考察は、方法論先行の試行などでは決してない。

作品表現の生成の要因を実体的に説明しようとする考察とは、益田勝実氏「中世的諷刺家のおもかげ」『宇治拾遺

物語』の作者^{注6}をいう。近年の宇治拾遺表現論は、ここで説かれる言説を出発点とし、これへの「読み」を経て問題を深化させたものであるといっても過言ではない。益田氏の行論は、

①宇治拾遺の説話排列において、各説話間に所謂「連想の糸」が見出されること。

②その「連想」の中身は、一つの話題を物語りつつ「角度を変えては、物語る話をつかみ直し、見直しして、次の話呼び起こしていく」もので、それを宇治拾遺の「手法」と認めうること。

③このような「手法」は「価値転換をはかる」「文学的に自由な眼」の介在をおもわせ、本来、批評精神と切り離しにくい関係にある説話文学にあって、「主体の批評の眼も複眼化し、より自由なものに成長していった」「△説話文学における中世▽の到来」を窺わせるものであること。

④宇治拾遺編者のかような批評精神の形成要因は複合的なものであるが、説話連関の「手法」は「人の話を聞きながら、語り手とやや違う関心で受けとめ、自分の話をそれに継いでいく△巡り物語▽的な場から生まれ」たものと見られ、批評精神の形成要因の一つとして、そのような院政期における「新しい話の場の形

態」の出現との相関関係が重視されてよいこと。

⑤しかし、それだけでは鋭い批評精神の出所を説明するに不十分で、「このひとりの中世的な文学者について、彼の説話集が内側から語ってくれる、彼の精神の相貌をなお詳細に検討しつつ、その由来するところも本格的に探り出したい」との研究展望。

として、展開される。ここに明らかなように、益田氏は、宇治拾遺の「手法」を「所与のエクリチュール」から分析的に抽出しながら、その生成を実体的な△巡り物語▽によって説明しようとしている。作品表現の生成の要因を実体的に説明しようとする考察^{注7}と見る所以である。しかし、氏の主題が編者の「鋭い批評精神の出所」を実体的に「探り出す」ところにある以上、それは必然の行論であった。したがって、△巡り物語▽は「手法」の「出所」、「批評精神」形成の一要因として扱われ、含意の如何は知らず、△巡り物語▽の作品化、あるいはその表現論的な意義に関する論述は見あたらない。^{注7}

宇治拾遺の研究史において、益田氏のこの論考は、全巻にわたる「連想の糸」を検証しようとする展開を導く。^{注8}これには、益田氏以前の指摘との呼応、今昔物語集の説話排列に関する国東文麿氏の「二話一類様式」の提唱などもかわっていよう。そして、以後しばらく続く「連想の糸」

の探索は、その過程で、これを試みるものに読解の「複眼化」を促し、説話が語る出来事に関する事実関係の考証結果についても、それを伝承論に絡めとってしまうのではなく、叙述の「背後」にあって表現を構成するものとして重ね読む「読み」の深化をもたらしことになった。^{注11}かような「連想の糸」を探る研究史の展開は、益田氏自身の「わたしの下調べでは、それが可能であるように思う。」との示唆をうけたものだが、宇治拾遺自体の作品形成に増補の可能性が残ること、^{注12}全巻を通じた「連想の糸」の確認が逆に連想の濃淡・断続による表現の妙趣を見失わせ、その詮索に終始するのであれば作品の表現性の説明からは遠ざかるとの見方などから、近年では、この研究史の展開に批判的な言及が目立つ。しかし、宇治拾遺の研究史にとって重要であったのは、こうして、この作品に関して特権的に「所与のエクリチュール」を読み込む試みが積み重ねられていったことであるに相違なく、近年の宇治拾遺の表現論はその点で確実にこれに連なっている。しかも、この読み込みは、△巡り物語▽という実体的な場とのかかわりの確認^{注14}をとおして、研究者主体の「読み」の結果が編者によって「表現されたこと」でありうるとの蓋然性の保証を得つつ試みられたものであった。作品を「一個の自律的な表現体」「所与のエクリチュール」として読み解き、この読書

行為の成立する仕組みを作品の表現性として認定するといった近年の方法論の選択は、有効性の根拠を、おそらくはここに有していたといつてよい。

三 宇治拾遺の表現—研究の現在

こうして、近年の表現論的考察の用いる方法が試行的な借りものではなかったことは証されるが、かような研究史をうけて提出される上掲四氏の論考は、ともに本格的な表現論でありながら、同一の議論を展開しているわけではない。つまり、いずれも益田氏の論を掲げて考察の出発点を示し、氏の論を承けて展開した「連想の糸」を検証する研究史を否定的にみていることにはかわりないけれども、それぞれが益田氏の論を受け取り直すその受け取り方に、微妙な違いを認めることができる。微妙な相違は、各氏の研究日程にかかわるものであるかもしれず、とすれば、これを審らかにせぬ者の安易な論評は慎むべきであろう。また、相違と見えるものも相互に関係し合っており、明確に区別できる性質のものでもないが、表現論に関する研究の現在を理解しておくために、恣意の誇りを承知の上でいくぶんの整理をあえて試み、ご批評を乞うこととしたい。

さて、四氏のうち、益田氏の論をもっともストレートな形で承けとっているのは、おそらく佐藤氏である。すなわ

ち、佐藤氏は、前節に示した益田氏の行論の②③④を承け、益田氏の所論の中心が、宇治拾遺における説話排列の「手法」に編者の「複眼化」した「批評精神」を窺い、「手法」の由来として△巡り物語▽場の形式を示しつつ、それが編者の「批評精神」の形成要因のひとつであったことを指摘するところにあることをおさえた上で、まず、作品生成の基底に△巡り物語▽的な「精神の場」を認め、その場の形式を「手法」化するなかで「精神の場」に連なり成長していった表現主体を考へることから出発している。「批評精神」とは「価値の相対化の精神」(「聖と俗、真と偽、正と負」などのさまざまな価値判断が入り乱れた自由な談話の精神)^{注15}を内容とするものであるとし、そのような「精神の場」たる△巡り物語▽場の「手法」化こそが、表現主体のうち「視点の拡散性と相対性」^{注16}を育み、作品の説話集としての表現形成を領導したと見るのである。氏の論は、益田氏が編者の精神性として抽出したものを作品の表現性として捉え返し、「批評精神」形成の実体的な場として示された△巡り物語▽を作品の表現形成の機構(≡しくみ)とみなして、表現論への架橋を果たしたものといつてよいだろう。

表現機構への注目のうちに、それが育む表現主体の「視点の拡散性と相対性」を指摘して説話集としての宇治拾遺

の作品形成を説明した佐藤氏は、この表現主体の「視点の拡散性と相対性」を、叙述レベルの「語られる出来事の放射する多様な解釈の可能性と戯れる」^{注17}有り様にも確認し、「説話を意味から解き放つ」宇治拾遺の表現性を明らかにする。氏の表現論の特徴は、作品の表現性の形成を表現主体の様態にそくして説くところにあるとみられ、「説話を意味から解き放つ」宇治拾遺の表現性も、△巡り物語▽場を手法化した表現機構につらなることで育まれた表現主体、「語りと共に揺れ動いていく流動する主体」によってもたらされたものとしている。

かような表現主体の様態にそくして作品の表現性を説く姿勢は、やがて「語られる言語または出来事と没主体的に一体化し、それらとともに揺れ動いている主体」^{注18}を発見させ、これを言語遊戯、物言い、語られる対象の身体動作に一体化する語りなどに確かめつつ、「演ずる主体」を見あわす。「演ずる主体」は、没主体的な一体化によって語りの中に姿をくります主体でありながら、その演戯は「自らに寄り添う出来事や人物の言語・身体動作等と相即的に戯れ」再演することで戯れる対象を「際立て」る仕掛けをそなえたものであるという。表現の機構と「読み」への仕掛けと。氏の表現論は、「演ずる主体」をキー・ワードにその接点を求めつつあるように見受けられるが、表現性の

形成されるしくみを表現主体に即して解明しようとする作品研究は、氏の一連の論考をもって確固たる指標を得たもののように思われる。

佐藤氏が益田氏の行論を表現論として捉え返し表現主体の様態に即して表現形成を説明しようとしたのに対し、同様に益田氏の行論を表現論の課題として引き取りながら、これを表現主体からではなく、中世の表現時空とのかわりから、宇治拾遺を表現史に定位するべく展開させているのが小峯氏である。院政・中世期が説話の時代であるとともに芸能の季節でもあるとの理解に立ち、両者が有機的にかかわりあう表現時空に宇治拾遺物語において読み解くことを試みた「宇治拾遺物語と△猿楽▽」^{注19}。ここでは、宇治拾遺が、価値や意味を一元化せず、より開かれた複眼的な視野を拓きえた根底にかかわるものとして、「△猿楽▽の磁場」が指摘される。これが、益田氏の残した課題、「それ（△巡り物語▽的な場の影響）だけでは、編者のあの權威を知らぬ自由さや、高らかに憎む者を笑い飛ばす奔放さ、鋭い批評精神の出所については、確かめる手がかりにもならない。」の言に真正面から答えたものであることはいままでもないだろう。しかも、氏は、「△猿楽▽の磁場」を実体的な「出所」として取り上げるのではなく、作品の表現形成に「方法として内在する△猿楽▽」を力説する。こ

ここに表現論への志向を確かめることは容易で、△猿楽▽論は、そのまま、「とるに足りない戯れや道化、ふざけた行為として否定的に処理され」「時として反体制の動きや秩序攪乱の異物として警戒される」猿楽の、批判力、反体制的性格を内容とする表現性に焦点が絞られ、△もどき▽論へと展開する。^{注20}そして、話型・伝承・語戯・構成展開にわたって、宇治拾遺の表現における△もどき▽の様相が確認されていく。細部についての異論はあろうが、作品の表現性を中世の表現時空において浮彫りにする形での表現論は、氏の論をもってその議論の場の整備を完了した観がある。

佐藤・小峯両氏の論が、益田氏の行論を正面から受け取り、表現論として深化させたものであるのに対して、他二氏のそれは、いくぶん趣を異にする。すなわち、ともに益田氏論文の主題であった編者の「批評精神」には直接ふれず、荒木氏は「本作品理解の基盤として、あくまでも、読むこと、読者の視点に立つことの不可欠性を示唆した」^{注21}ものとしてその含意を読み取るところから出発し、一方、森氏は「貴人の前で語り手たちが順に物語を語りついでいく『巡り物語』の場を、宇治拾遺物語の説話とその配置の手法に重ねあわせてみせた」ところに関心を寄せ、「宇治拾遺物語の世界は巡り物語の場そのものである」との観点から、氏自身が聞き手（＝読み手）として物語の場に交わる

ことで作品の表現を読み明かそうとする。^{注22}

両氏に共通するのは、「自らの享受姿勢を作品分析の視角へと転ずること」^{注23}「みずからの読書行為が成立するしくみそれ自体を、批判的に解読すること」^{注24}が主張されるように、自身の読みを表現のしくみに還元して作品の表現性を見定めようとする点で、又、そこから「物語を意味に帰属させない、あるいは、物語の意味作用を混乱させさせさえる」^{注25}作品の表現を確認し、これを論の始発としているところも一致している。そしてここから、森氏は、説話相互の連関評語・言語遊戯といった言語表現レベルの諸相についての周到な分析を経て、かような表現が「周縁に視線を分散させる読書行為」を導き、意味を「複線化」させたり「無駄に消費」させながら、「物語の意味とみなされるもの、あるいは物語が提示する価値というものが、相対化される局面」に読者を立ち合わせさせるありように注目し、荒木氏は、所収説話相互を精緻に係付けながら、そこに「時間」の軸を読み取り、「相対する価値の拮抗を繰り返しながら、徐々に『下』れる有り様を露呈」させていく作品の展開に、既成（過去）の価値観の逆転を提示して「現在を高らかに歌いあげ、鮮烈に肯定」したまた哄笑する表現世界を窺うことによって、統合的な作品理解の可能性を探っている。「事物の多面性を多面性のままに、語の多義性ある

いは語義の未分化性を活かして提示しようとする」表現性と、「興じみる」(序)べき物語の終わりに『ヲチクダル』『今』の『ヲチ』を付け、現在を哄笑する」統合的な表現性。結ぶところを異にしつつも、両氏の論は、作品の言葉に即した読みを^{注26}とおして表現成立のしくみと作品表現の中身を問う作品研究の極点を示すものといつてよいだろう。

このようにして、四氏の表現論は、益田氏の論の影響下にありながらも、そこからの展開に種差を示している。もちろん、四氏の論は相互に関連しあい、また、他者の論点をも視野にいれた行論となっているけれども、稿者の理解によれば、相対的な特徴として、佐藤氏は表現形成の機構そのもの、及び表現形成と表現主体とのかかわりを、小峯氏は作品の表現性と時代の表現時空とのかかわりを、森氏は作品の語り(編纂と説話叙述)における表現のしくみと作品の表現性を、そして荒木氏は表現のしくみとともにそこから統合的に読み取りうる作品表現の中身を、それぞれの関心の所在としていると観察される。

四 表現の成立するところ

かようにして、四氏の表現論は、それぞれ独自の観点から論を構成するものと認められるが、宇治拾遺の表現性として注目するところはほぼ共通している。すなわち、「読

者を眩惑し、はぐらかし、煙にまく、したたかな^{注27}語り」^{注27}と戯笑性がそれである。これは、あらためて指摘するまでもなく、益田氏が編者の「批評精神」として析出したものにほかならず、四氏の論考は、これを表現性の問題に据えなおして深めつつ、その形成、表現のしくみを説明しようとしたものということになる。

さて、上のごとく近年の宇治拾遺の表現をめぐる議論を理解するとして、小論は、指摘される作品の表現性について、これが成立するところを関心の所在とする。「読者を眩惑し、はぐらかし、煙にまく、したたかな^{注27}語り」と戯笑性は、享受者(読者)の作品への働きかけを介して成立する。その意味で、宇治拾遺の表現性の成立するところとは、享受者の「読み」が生成されるところにほかならない。小論は、そのような「読み」が生成されるところに注目し、これが成立する条件、前提といったことをあらためて考え、そこから作品の表現位相を窺おうとするものである。論点を明確にするために、事例に即いて論述を進めることにしよう。まず、第二〇話「静観僧正(増命)、祈雨、法験事」を取り上げる。本話は、次の十条をもって構成されている。

①延喜御時の早魃の折、六十人の貴僧による大般若読誦の祈雨法もその験なく、

「御門を初而、大臣・公卿・百姓・人民、この一事より外の歎なかりけり。」

との状態であった。

②そこで、帝は、藏人頭を通じて次のように増命に命じた。

「ことさら思食さるゝやうあり。如是、方々に御祈どもさせるしるしなし。座をたちて、別に壁の本にたちていのれ。おぼしめすやうあれば、とりわきおほせつくるなり。」

③増命は、

a 「其時は律師にて、上に僧都・僧正・上臈どもおほしけれども、面目かぎりなくて」

b 「南殿の御階よりくだりて、へいの本に北向に立て、香炉とりくびりて、額に香炉をあてゝ、祈誓した。」

④その様は、

「みる人さへくるしく」

思うほどで、陽盛りに誰も日向を避けるなか、

「涙をながし、黒煙をたてゝ、祈請」

した。

⑤すると、

「香炉の烟、空へあがりて扇ばかりの黒雲になる。」

⑥その場の人々は、

「上達部は南殿にならび居、殿上人は宜陽（他本、弓場）殿に立てみるに、上達部の御前は美福門よりのぞく。」

といった具合で、神泉苑から昇るはずの竜に注目している。

⑦と、その眼前で、

「其雲、むらなく大空に引ふたぎて、竜神震動し、電光大千界にみち、車軸のごとくなる雨」
が降った。

⑧その結果、

「天下たちまちにうるほひ、五穀豊饒にして、万木果をむすぶ。」

⑨増命のこの法験に、

a 「見聞の人、帰服せずという事なし。」

b 「御門・大臣・公卿等、随喜して、僧都になし給へり。」

⑩そして、一話は、次のように結ばれる。

「不思議の事なれば、すゑの世の物語と（他本、に）かくしるせる也。」

一見して、験者増命（二・中歴13「名人歴」）の祈雨法験譚であることが了解されるであろう。

ところで、本話は、同一話題が打聞集第四話にみえ、これについての先行研究が多くそなわっている。^{注28} そのうち、黒部通善氏論考によれば、本話題は扶桑略記（延喜十五年秋月条）に所見の静観僧正伝記事、

天下疱瘡。都鄙老少無一免者。天亡之輩盈滿朝野。主上聖体不予。請座主法眼和尚位增命。令護玉辰。勅曰。頭痛身熱。不可堪忍。和尚合眼祈禱。香炉統烟。念誦連声。熱惱忽散。聖体安慰。帝皇尊重。授少僧都位。歸山而上辞表。（以上本伝）（新訂増補国史大系）

が伝える聖体加持祈禱による勸賞（授少僧都位）の出来事を「原説話」とし、その「原説話」が説経の場で語られる際に、聴衆に身近な、より生活に直結した話題である祈雨話題に変容したものとされる。そして、その変容の間には、延喜十五年が旱魃の甚だしい年でもあったこと、また、

仁和元年有勅備内供奉。時年四十三。太政大臣花山僧正共奏曰、「天下之僧耆宿如林。何以下臆之僧猥蒙拔擢哉。」帝曰、「非是凡流。朕熟知其德行而已。」

（日本高僧伝要文抄―大日本仏教全書―）
との、帝のよる異例拔擢の一件、あるいは、

（延喜）十三年夏天下大旱。和上千手堂修法祈雨。至于竟日油雲四合甘雨滂沱。
（同上）

との祈雨法験の話題、さらには古代の祈雨説話の話型など

が影響しているという。^{注29} 打聞集話^{注30}は、

(イ) 香炉ヲ取テ、南殿ノ御橋ヨリ下テ、ヘキノ南ニ北向ニ立テ、目ヲヒシギテ立リ。（宇治拾遺話③bに対応）

(ロ) 此律師持テ立ル香炉之煙、ス、ニ上サマニ登レ立ル。

香炉ヲ左右手ニ取クビリテ、目ヲヒシギテ、マナカミニスヘテ、香炉ヲ額ニ当タリ。（宇治拾遺話④に対応）

との増命合眼祈禱の姿をかたり（扶桑略記記事傍線部に対応）、また、増命への指示中にある、

サ思食様アリテ、如是仰ルル也。（宇治拾遺話、上掲梗概②部分）

と、叙述末尾の

王ド、「賢ク我ハシケル□」貴思食テ、（宇治拾遺話、上掲梗概⑨bの位置）

との呼応を備えて増命法験を予見し拔擢に奏功を果たした帝の「賢」を描く（日本高僧伝要文抄・仁和元年記事に対応）など、たしかにこれらの諸話題との関係がみとめられる。増命の叙僧都位の経緯を扶桑略記記事に信をおいて理解するならば、本話題は指摘されるような変容をえて形成されたものとして、おそらくは誤らない。

*

こうして、本話題は、増命の聖体加持祈禱譚から祈雨法

験譚への変容をもってその形成を説明しうるものであるが、かような形成を窺わせる打聞集話と同一説話の関係にある宇治拾遺話は、その叙述行文に打聞集話と異なる点をいくつかもっている。たとえば、増命祈請の場面では、上に引いた合眼の描写(打聞集(イ)中)が宇治拾遺話にない。合眼祈請の姿がどのようなイメージ表出にかかわるものか見きわめがたいけれども、宇治拾遺はこれを描かず、かわりに、炎熱のもとで涙をながして祈請する増命の姿とこれを見る人々の思惑とを描く(上掲梗概④)。しかも注意されるのは、この叙述の位置が、法験の現出へと連なる打聞集話(回)は⑦の直前にある)と異なり、帝の命をうけた増命の心中を解説した叙述(③ a 打聞集話にはなし)に続くものとなっている点である。③ a は「其時は律師にて、上に僧都・僧正・上臈どもおはしけれども、面目かぎりなくて」とある部分。これは、打聞集話で帝の命を伝える蔵人の言葉にある「下ラウナリトモ」(宇治拾遺話になし)にかかわっているように、宇治拾遺話は、帝の命をうけた増命が「面目かぎりなくて」、「みる人さへくるしくおも」う程に「熱日」のもと「涙をながし」祈請したとして、彼の姿を描いている。つまり、そこには、異例の抜擢に法験をもって応じようと懸命になっている増命とともに、これにいくぶん心理的な距離をおいてながめる人々が語られているのである。

異例の抜擢に法験をもって応じた増命との姿は、打聞集話にも描かれる。打聞集話はさらに、上述のとおり、増命を見出しえた延喜帝の「賢」をも語るものとなっている。すなわち、打聞集話は増命の請雨法験とこれを見出した延喜帝の「賢」とを語って完結する。しかしそこには、宇治拾遺話にみとめられる、祈雨法に懸命な増命の姿の強調とこれに心理的な距離をおいてながめる人々の視線の描出はない。もちろん、このような宇治拾遺話の様態については、帝の異例の抜擢に至誠の心をもって応じようとする姿を、増命称揚の文脈でより強く語ろうとしたものと見ることも可能だろう。けれども宇治拾遺には、そのような「読み」を揺さぶるいくつかの仕掛けが用意されていた。

仕掛けの一つは、一話中にある。すなわち、帝からの言葉として「ことさら思食さるゝやうあり。」「おぼしめすやうあれば、とりわきおほせつくるなり」(②)を示しながら、これに呼応する叙述を帝にかかわるものとして持たない点がそれである。打聞集話の場合、末尾に、

王ド、「賢ク我ハシケル□」貴思食テ、僧都ニ成給テケリトナム。

をそなえており、これとの対応によってはじめの「サ思食様アリテ」が増命法験の確信を内容とする思惑であったことが知られる。一方、呼応する叙述を帝にかかわるものと

して用意しない宇治拾遺話の場合、帝の思惑の中身は明らかにされないままでおわる。しかしその結果、宇治拾遺話の「おぼしめすやうあれば云々」は、この直後に描かれる増命の姿、「面目かぎりなくて」との対応関係をより強固に成立させる。そして、これが先の、「みる人さへくるしくおも」う程に「熱日」のもと「涙をながし」祈請した増命の描写と結び付くとき、帝の言葉を褒賞を匂わせたものとして理解しその餌に眼色を変えた増命像が立ち現れることになる。そこでは、帝の思惑をほのめかす言葉が二度にわたって繰り返される点（打聞集話は一度）が、増命を餌で釣る騙りの呼吸をよく伝え、これに反応して期待に胸膨らませる姿を推し量らせもする。また、「其時は律師にて、上に僧都・僧正・上臈どもおはしけれども」として列挙される僧位が、増命の期待の中身を示唆するものとして相應の意味を文脈に浮上させることにもなる。帝の言葉に褒賞を思う増命は、名利に心動く増命である。宇多・醍醐両帝の尊崇をえて貴族社会に深くかかわり、十六年にわたる天台座主、つづく法務職就任と、長く顕職に身をおいた増命を確認するならば、これに対する見方としてそのような視線が送られることはありえたことといつてよいだろう。

仕掛けの第二は、前話が想起させる話題。第十九話は清徳聖が母を成仏させ、餓鬼たちを救済したことを語ってそ

の慈悲業を話題にするもの^{注31}。師輔の結縁供養に応じて餓鬼に食を施した清徳は、その帰路、「四条の北なる小路にゑどをまる」。「ゑどをまる」のは清徳の「しりにぐしたるもの」すなわち餓鬼たちだが、その姿が見えぬ衆人には清徳の行為と見なされる。これは、類同性を介して増賀の一件を想起させる。宇治拾遺第一四三話「僧賀上人、参三条宮振舞事」。しかし作品内に確かめるまでもなく、発心集（一五）が梗概だけを記して話題の全体を示唆している有り様に明らかなく、それは周知の一件であった。この増賀の偽悪行為を第十九話への「読み」に導いていた享受者にとって、帝の拔擢に懸命祈請して法験を示す増命は、増賀に对照され、名利名聞を求めるとして像を結ぶことになろう。そして又、増賀との相同に像を重ねる清徳聖とも对照されることにもなる筈である。

もちろん、増賀との対比は、作品内で完結する読書行為によって果たされるとして、そこに作品の表現のしくみを窺う判断は有効である。その意味では法験の勸賞を拒んだことをかたる第一〇一話「信濃国聖事」、第一九三話「相応和尚、上都卒天事、付染殿后奉祈事」なども、類似話題としての関係付け、その後の对照をへて、増命の叙僧都位を貪名利の文脈で読ませるものとしてよい。また、基経不例のおり、極楽寺の僧が召しのないままに参上し、「中門

の北の廊のすみにかぐまりて」ひそかに仁王経を「他念なく」読誦してその験をあらわしたとの第一九一話も、祈請の形態の類同性を介して第二〇話に關係付けられうるものであろう。該話の極楽寺僧は「やむごとなき僧」を越えて験をあらわして褒賞に与かり、「ことの外びくしくてぞ罷出」る。それは「殿うせ給なば世にあるべきやうなし」との我が身の行く末を案じてのことであつた。そして一話の話末には

されば、人の祈は、僧の淨・不淨にはよらぬ事也。

たゞ心に入たるが験ある物なり。

とある。この部分、今昔物語集（卷一四三）^{注32}は、

然レバ、人ノ祈ハ僧ノ清シ濁キニモ不依ズ、只、誠ノ

心ヲ至セルガ験ハ有也ケリ。極楽寺ノ僧ニ験劣レル人、

若干ノ僧ノ中ニ有ケムヤ。

梅沢本古本説話集（52）^{注33}は、

ひとのいのりは、たうときもきたなきも、ただよくころにいりたるが、げんあるなり。

とする。「他念なき」祈請が験をもたらすことを説く点、

同じだが、宇治拾遺話が「僧の淨・不淨にはよらぬ」とするところ、微妙に他と異なっている。今昔・梅沢本が僧の身分、姿をいうのに対して、宇治拾遺話のそれが、極楽寺僧の心のありようにかかわるものであるとするならば、宇

治拾遺は、身の保全に端を発する僧の祈りに「不淨」を見ていることにならう。帝の拔擢に振るい立つ増命と密かに専心祈請する極楽寺僧と。対照は差異を発見させながらも、欲心あるものの法験の可能性を示して、名利を求め増命にも果たされえた法験を説明する。

さらに、第二〇話に關係付けられる作品内の話題として、何よりも第一〇五話「千手院僧正、仙人ニ逢事」を忘れることはできない。「香炉の煙」と「泣く」増命を描いて第二〇話との連関をたもつ本話題は、寸時「年比の物語」に陽勝の仙力を減退させた増命の「人げ」を語る。「人げ」は「仙力」に対照され、増命の「俗」を確認させることとなる。

＊

如上は、現在の宇治拾遺研究が用いる読解の方法にしたがつて、第二〇話の表現を採ったもの。類話との比較、表層の叙述、背後の事実との関係、隣り合う話題（あるいはこれが呼び起こす話題）との対照、作品内の別話題との連関。こうして、本話題は、増命の名利を求め姿を描くものとなる。しかし、無論、一話はそれだけを語るものとしてあるわけではない。梗概を示したところに記したように、本話題は、何よりもまず験者名人として知られる増命の祈

雨法験譚と了解されるものとしてあった。つまり、打聞集話と同様にして増命の祈雨法験を語りつつ、いくつかの仕掛けをそなえてこれを逆転させ、名利に心動いた増命をも語っていたということになる。本話の話末文は、おそらくかような有り様に対応している。

不思議の事なれば、すゑの世の物語と（他本、に）かくしるせる也。

末世に見出しがたい話題であるので紹介したというのか、末世にふさわしい話題であるので紹介したというのか、判断はいずれも可能である。「読者を眩惑し、はぐらかし、煙にまく、したたかな語り」との宇治拾遺の表現性は、ここに発現する。そして、名利に心奪われた増命に焦点をあわせれば、増命の祈請する姿を強調する語りの言立て、心理的な距離をもってそれを眺める人々を配する構図に、戯笑性を導く仕掛けを窺うこともできるだろう。

ところで、宇治拾遺の本話題をこのようにみるとして、その表現は、祈雨法験譚として増命を称揚する話題性が、名利を求める姿の確認をとおしてめぐり返されていくところに成立する。とすれば、かような表現が成立する要件には、上にみた“読み”の仕掛けは勿論、これに加えて、一話の祈雨法験譚としての了解が指摘されなくてはならない。一話を祈雨法験譚として了解させるのは、話題性、あるいは

は“香炉の煙”、“黒煙”の道具立てで充分だといえればそれまでだが、打聞集話と比較するとき、宇治拾遺はこの祈雨法験譚としての了解を、叙述の上でもかなり意識的に仕組んでいることがわかる。たとえば、法験があらわれて雨が降る場面(⑦)は、打聞集に、

此煙り虚空ニ付ト見ニ、雲、空ニ満テ、カキ闇テ、雨俄ニウチコボス様ニ降ヌ。

とある。現象としては同じ事を描くが、

其雲、むらなく大空に引ふたぎて、竜神震動し、電光大千界にみち、車軸のごとくなる雨ふりて、

と語る宇治拾遺話の方が祈雨法験譚の常套を踏まえていること、祈雨日記・江談抄(類聚一17、水言211)・僧伝(尊意、元杲、その他扶桑略記の祈雨記事)などに見られるとおりである。竜神の描写は、この直前にある、場の人々の注目の方向を神泉苑（註）としていたらしい点(打聞集話は増命)にかかわり、ここにも祈雨法験譚としての整備を指摘することができる。それだけではない。⑦につづく、

⑧天下たちまちにうるほひ、五穀豊饒にして、万木果をむすぶ。

は打聞集話にない叙述、また宇治拾遺話①⑨は、

①御門を初而、大臣・公卿・百姓・人民、この一事より外の歎なかりけり。

王下愁給テ、(打聞集、対応部分)

⑨見聞の人、帰服せずといふ事なし。さて、御門・大臣
・公卿等、随喜して、僧都になし給へり。

見ト見人貴又无シ。王下、「賢ク我ハシケル□」貴
思食テ、僧都ニ成給テケリトナム。(打聞集、対応
部分)

とあって打聞集話との相違(傍線部)を示す。これらに祈
雨法験記録との文体の近似をみることは簡単なことだろう。
ここから、依拠資料の文体如何を問題にするのは無意味で
ある。祈雨法験譚として話題をかたる打聞集話は、「空イ
ヤ晴ニくテ、イヤテリニテリ倍ル」「トザマカウザマニ祈
ドモ」とあるなど、かような文体に遠い。つまり、宇治拾
遺話は、一話を祈雨法験譚として見せかけるために、この
文体をあえて選んだと考えられるのである。そして宇治拾
遺は、これをめくり返して、表現を重層化させる。

「読者を眩惑し、はぐらかし、煙にまぐ、したたかな
△語り▽」としての作品の表現性を成立させるものが、本
話の場合、表層の表現をめぐり返す「読み」とその仕掛け
であったことは、いくら強調されてもよい。しかし、一話
の表現が成立するところを見さだめるためには、めくり返
されるものへの注目も、依然として重要であろう。増命の
名利欲をあばく「読み」のしかけと、その前提にある、叙

述に実現された法験記録の文体模倣と。ここでは、既成の
あるいは現行の法験譚の文体を忠実になぞって表層の表現
がみせかけられ、増命尊崇の文脈が再構成される。そして
作品は、増命の利欲心をあばく仕掛けを仕組んで話題への
視線を複線化し、賞賛の文脈を解体させていく。複眼化に
よる価値の相対化。これを支えているのは、相対化を促す
「読み」の仕掛けであるとともに、既成の文体の忠実な模
倣であった。

文体の模倣——、これへの注目は、一話の理解を、増命
の相対化からさらに祈雨法験譚の相対化に向かわせること
になる。祈雨法験の記録は祈雨日記・祈雨法記などにみ
るとおり、勸賞の記事をとまなう。賞をきそい、験を主張
し、自らを称揚する寺家僧侶の様態を写しとどめたものが
これらの記録であってみれば、名利は賞賛の文体に内在す
る。宇治拾遺話における文体の模倣は、さような祈雨法験
譚の二面性の発見に基づき、それを暴こうとしたものとな
ることが出来るだろう。その意味では、文体の模倣は毒を
含み、既成の祈雨法験譚への「もどき」の姿勢を窺わせる
ものといつてよい。そして、ここに作品の表現性、表現主
体の「批評精神」を指摘することも確かに可能であるにち
がいない。だが、小論の関心は、今そこにない。むしろ、
表現性が導かれる語りのしくみ、「もどき」の表現性に

そくしていえば、表現主体の内なる「もどき」の精神が表現として成立する要件をこそ関心の所在とする。それは、享受者による「文体の模倣」の認知にほかならない。上述の、叙述の型・語彙に祈雨法験の記録・伝を想起して一話への意味付けを果たした後、作品の仕掛けに増命の貪名利を発見して価値の相対化に目覚め、そこから立ち戻って叙述の型・語彙に「文体模倣」の作為を確認しえた享受者だけに、「もどき」の表現は成立する。つまり、表現は、享受者の知識とこれを参加させて意味を辿ろうとする働き掛けとを前提として成立することになる。

本話において、享受者に求められていたのは、祈雨法験の記録文体に関する知識だけではない。一話中の請雨の法として描かれる煙と雲との結合は民間祈雨の共感呪術にかわり、その伝承感覚に基づくものとの指摘があるが、これも見せ掛けられる意味の了解のためには必要な知識だろう。そして、増命の僧歴。小論の関心の所在としてある「表現の成立するところ」とは、かようにして享受者に喚び起こされるものが表現に機能する局面をいう。

五 喚び起こされるもの

享受者に喚び起こされるものが表現に機能する局面は、さまざまである。たとえば、第七話「龍門聖、鹿ニ欲替

事」について、龍門聖の行為と「鹿皮」の素材が釈尊を想起させるとの指摘があるが、そこに喚び起こされる釈尊と描かれる聖の行動の具体との対照は、釈尊ではありえなかった聖の、しかし人間らしい弱さを露呈しつつも捨身の教化救済の行に向かう姿を浮彫りにする。これは、対照が差異を見あらわさせ、その差異が、表現を支えている事例。

つまり、対照の導く差異は、価値の逆転に「もどき」を成立させるだけでなく、このように表層の表現に奥行を与えるものとしても機能するということになる。第七話の場合、喚び起こされる釈尊伝（本生譚）は説話伝承の世界に定着した話題（三宝絵詞上、今昔物語集巻五など）だが、ここでは、かような伝承世界に定着した話型・モチーフの参加をみとめうる事例をいくつかとりあげて、「喚び起こされるもの」が表現に機能する局面の諸相を確かめておくこととしよう。

まず、第二話「丹波国篠村平尊生事」。本話については、仲胤僧都の謎解きと話末文の「はぐらかし」とが問題にされて^{注37}いるけれども、一話の表現が成立するところには、前半の夢の示現のイメージさせるものが介在しているように思う。本話の夢は、何ものかが土地のものに別れを告げるというものだが、かような「去る」モチーフは神話における禁忌とその違犯を想わせ、宇治拾遺に近い例としては、

仁和寺辺の女が「依天下政不法、賀茂大明神棄日本国、可令渡他所給」と夢にみた話題（百鍊抄、仁安元年七月条、古今著聞集・神祇一21）があった。これによれば、夢告は「民を捨てる神」とのイメージを喚起することになる。第一話には、「不浄読経」の道命から遠ざかる仏法守護神が語られていたが、本話はそれとも響き合う。しかし、夢告の主は「かしらおつかみの法師^{注38}」であったという。「民を捨てる神」と「かしらおつかみの法師」と。この懸隔に夢相を判じかね翌年の平葺絶滅に不審を深める篠村の村人を了解してこそ、平葺と「かしらおつかみの法師」とをあえて関係付け、沙石集話（七18）などに記される見方を背景に平葺群生を「不浄説法する法師」の「つぐない」であったと解くことで村人の不安を除いた仲胤の巧弁の才が際立つことなるう。そこでは、夢告に自らのイメージ（「民を捨てる神」）を参加させて村人と一体化した享受者も、仲胤の言葉に、村人とともに不審を解いていく。いわば、参加させたイメージが相対化され無化されていく局面に登場人物とともに立ち会うのである。「天の恵みならぬ不浄説法僧の転生であったならば、（美味とはいえ、）毒葺と間違ふことも多い平葺にそれほど執する必要もあるまい。」——話末は、宇治拾遺特有の「はぐらかし」とみるのも一解だが、そういう享受者にこそ自然に受け入れられるもの

としてみることもできるだろう。

続く第三話「鬼ニ癭被取事」は、第二話における不浄説法僧がうける悪報とのモチーフがひびき、この悪報をえた異形の翁が、人里離れ薪をとって世をすごし（法華経提婆達多品「汲水拾薪」を読み込めば、功德を積んで。今昔一五6など）、異界に異形の鬼と遭遇して人間性を回復する物語り。ここでは、異界のイメージの参入が物語の論理を支える。これもまた、享受者の参加させるものが、相対化されるのではなく、表現を支えた事例といえようか。異界のイメージの参入が表現の成立するところにみとめられる事例には、ほかに第一八話「利仁、暑預^{つん}粥事」がある。さまざまに読み取られうるこの話題は、逢坂関をすぎでち、狐を操る利仁、京での身分関係を逆転させて五位を圧倒する有仁・利仁を描いて富裕な敦賀の里の異界性を示し、一月あまりの滞在と帰途に際しての種々財物贈与とを語って異界訪問譚としての読み取りを可能にしている。地方豪族の権勢と富裕を表層にみせかけつつ、枠組みは享受者に異界訪問譚をイメージさせ、両者の重層を「読み」に促しながらも、しかし、異界訪問者の要件を備えない五位、現実に台頭する異人ならぬ利仁、欲求の対象としてある薯蕷粥という道具立が、異界訪問譚との差異だけを露にしているといった構図。一話の興趣はここにも成立する。

第一八話は敦賀を異界に見立てた異界訪問譚だが、前話の第一七話「修業者、逢百鬼夜行事」は、百鬼夜行が現出させる異空間に紛れ込んだ修行者が異界たる肥前国に移された話題。「京から地方への突然の移動」^{注39}で両話はつらなる。本話題の興趣は、不動咒を唱えた修行者が、不動となつて津の国から肥前まで動かされたこと、或いは不動（火界）咒・不動―火焰（第三八話「絵仏師良秀、家ノ焼ヲ見テ悦事」―火の国（肥前国風土記）―肥前、の語の連関といたあたり）にありそうだが、一方で、一話は、蘇生譚としての形態をたもち、そこに相応の表現を成立させていると見ることが出来る。移された場所が「はる／＼とある野の、きしかたもみえず、人のふみ分たる道もみえず、行べきかたもなければ」とあるのは炎魔庁に至る道中の景に對応しているし（第四五話「因幡国別当、地藏菩薩作差事」でも蘇った専当法師の「冥途の物語り」に「大なる鬼二人きたりて、我をとらへて、追いたて、ひろき野に行」とある）、また修行者が京の人々に語ったとして示される出来事は一話前半に語られるところと重複するもので、蘇生譚の「冥途の物語り」を模倣したとする以外に繰り返しの意図が見出せない（なお、前半部分も、地の文に「我をつら／＼みていふやう」「我を引さげて」とあるなど、「冥途の物語り」の気味がある）。さらに、本話の一つ前、す

なわち第一六話は「尼、地藏奉見事」であった。地藏が冥界衆生の救主として蘇生譚につらなっていること、例示の必要もない。しかも、「地藏ハ大日ノ柔軟ノ方便ノ至極、不動ハ強剛ノ方便ノ至極」とされ、源信妹の安養尼は「火界ノ呪」と「地藏ノ宝号」によって蘇生した（沙石集二五―梵舜本（日本古典文学大系）―、撰集抄九三）。かくして第一七話は、前話と一話中の叙述との連絡に蘇生譚をイメージさせる。そして、蘇生譚は話題に重層する。しかし、本話の場合の修行者は、不動咒を唱えながら鬼に動かされて肥前国（肥の国―火の国―火炎地獄）の奥に迷い込み、地藏ならぬ「馬に乗りたる人」に救われて一命をとりとめ、独力「船たづねて京へのぼりにけり」とある。重ねられる蘇生譚との間に、いくぶん差異が見出されるというべきか。そういえば、天狗に騙され奥山の榎木の梢に縛り付けられた念仏者、「智慧なき聖」もあった（第一六九話「念仏僧、魔住生事」。今昔二〇12は「三修禪師」のこととする）。「知恵なき」修行者の「あさましき」失敗譚。あるいは、京での「冥途の物語り」に焦点を合わせれば、これを不動咒靈験の体験として騙る修行者の「狂（枉）惑」ぶりが視野に入ってくることとなる。本話もまた、喚び起こしたものと叙述との間に差異が仕組まれ、そこに表現を成立させているというべきであろう。

“民を捨てる神”、“異界”、“異界訪問譚”、“蘇生譚”——
伝承世界での既成モチーフや話型は、宇治拾遺において、かようにして表現に参加する。つまり、この作品は、伝承世界での伝統的な表現を前提に、これを享受者の営みを介して参加させつつ、表現を成立させているのである。紙幅の都合上、挙例は以上にとどめるが、こうして、宇治拾遺の表現が成立するところに機能する“喚び起こされるもの”は、確かなものとしてある。作品空間の内側に視点を固定して、そこにみとめられる連関に作品表現への“読み”を導くだけではなく、かようにして外側から“喚び起こされるもの”が表現に機能する局面のいちいちにも目をそいでいくことが、伝承世界と分かち難く結び付いた説話をもって構築される宇治拾遺という作品の物語空間を理解するためには、必要なことのように思われる。

六 宇治拾遺物語の表現

— 既成の表現世界との交渉 —

さて、前節の例示をもって、宇治拾遺物語が伝承世界の伝統的な表現を前提に、これを参加させながら作品独自の表現を各話に実現していることは明らかであろう。もちろん、宇治拾遺が前提にしているのは、伝承世界の表現にかぎらない。さきに取り上げた第二〇話は、祈雨法験譚とい

う点では伝承世界にかかわっているが、指摘しておいたように、それは漢文体・記録文体を叙述に採用したものであった。そこでの記録文体は、僧伝または祈雨日記の表現法の模倣としてあり、宇治拾遺は、伝・日記（記録）の表現を借りてこれに付着した価値を喚び起こし、それをめぐり返して表現を成立させていた。つまり、表現の前提に“喚び起こされるもの”として、書記文献である記録（伝・日記）の世界があったことになろう。

そればかりではない。たとえば、著名な一〇話「秦兼久、向通俊卿許、悪口事」^{注40}。これには周到な論考がそなわっており、なかでも三木氏論考は、本話の背後にあって、語られる出来事に重ね合わせられていたと認められる事柄を指摘して貴重である。すなわち、白河院が後三条院の遺言を無視し輔仁親王を退けて堀河帝を即位させたとの一件を軸に、白河院に厚遇された通俊と後三条院を輔仁とともに偲ぶ兼久（他書は兼方）との対立の図式を一話の構図に対応させて読み取るのがそれで、袋草紙が兼方歌を「撰集ニ秀歌漏常事」の一例に示し^{注41}（50）、また本話題を後拾遺和歌集に対して行われた批判を紹介する文脈で引くところ（54）や、顕昭六百番陳状が皮肉の口吻で「同詞なれど、人によりて悪くなる」例にこれを示している点からしても、この話題には通俊への非難の気味がこもり、説かれるよう

な背景を指摘することは確かに可能だろう。ただ、本話題の類話のすべてが通俊非難の方向で出来事を語っているわけではない。撰集抄（八二〇）では、^{注42}

但し、中納言難じ給へるは、去年見しに色もかはらで咲きにけりといふまでは、いかなる風情の句も付きぬべきに侍るに、花こそ物はおもはざりけれといふ、無下によはき句なりと、そしり給へるにこそ。ただ花こそといふこそをにくみ給ふにはあらじものを。しかる上は、何しにか俊忠の歌にはひとしむべき。

として兼方を批判し、今物語（四一）もいくぶん兼方に距離をおく姿勢を示す。これらは、撰集抄話が兼方・俊成の一件として語っているところに窺えるように、おそらく、指摘された事柄と無関係に話題が享受されたことを伝えている。宇治拾遺が、説かれるように、背後関係との連絡のうち表現を成立させたものであるとすれば、これらとの対照において、それは和歌歌論世界における本話題の理解に連なっており、かような世界で了解されている知識を、享受者に「喚び起こされるもの」として、作品は求めていることになる。さらに、宇治拾遺話は、通俊の兼久歌批判の内容に、他話にない

ただし、けれ・けり・けるなどいふ事は、いとしもなきことばなり。

を加えている。兼久歌にみえない「ける」を含むのは、兼久が反論のうちに引く公任歌の「ける・けれ」を視野に入れたもので、これは歌病（同字病）を指摘した批判。独自異文の故をもってそれを宇治拾遺の手によるものとみなすことが許されるならば、ここでも、和歌世界の議論をふまえ、さような議論についての知識が前提とされていることになる。しかも、注意されるのは、この独自異文が、

侍、通俊のもとへ行て、「兼久こそ、かうかう申て出ぬれ」とかたりければ、治部卿うちうなづきて、「さりけり、さりけり。物ないひそ」とぞいはれける。

との小話題を語って結ばれることとかかわっていると見られる点である。兼久の批判に自らの非をようやく認めたとをいうとも解されるこの小話題は、通俊の兼久歌への批判点（「こそ」の使用、「けり」の繰り返し）をもってする掛け合い（傍線部）を内容としている。己が批判した語を自らの言葉に繰り返す愚をいうのか、或は逆上していちいちに反論する兼久を嘲って侍と通俊とが交わした言葉の戯れをいうのか、^{注43}例によって判然としないけれども、通俊の批判、兼久の反論をうけて作品が一話の結びに仕組むこの言語遊戯は、話題の焦点を、ことさら和歌評価に関する議論からずらしたものと見てよいだろう。言語遊戯が成立させる戯笑性には、歌合判詞、歌論（十訓抄一〇にも）が

示すごとく結局のところ和歌評価の絶対的な基準とはなりえないこの種の議論に終始する和歌世界へ向けられた、宇治拾遺の批判的な視線も窺える。和歌世界の知識にそくして話題を語り、享受者にも知識の「喚び起こし」を要請しながら、最後にはそれを突き放して距離をおく宇治拾遺。本話においても、この作品の表現性を確認することができ、これを成立させているのは、「喚び起こされるもの」としてある和歌世界の知識であった。

和歌世界の知識にかかわって表現が成立する話題には、このほか、「大江山」歌にまつわる逸話を背景にもつとされる第三五話「小式部内侍、定頼卿ノ経ニメダル事」^{注44}もあるが、「喚び起こされるもの」としてあるのは、もとより和歌世界の知識だけではない。たとえば、第三四話「藤大納言忠家物言女、放屁事」は、千載集（一六雑上⁹⁶⁴・965）^{注45}所載の忠家・周防内侍贈答歌との関連をもつとともに、説かれるように「作り物語の伝統へのパロディ」^{注46}になっている。また、第二九話「明衡、欲逢殃事」は、明衡が或る女房との逢瀬の場に「下種の家」を借りたことが語られ、密会の場を別に求めるところに、源氏物語夕顔の巻の光源氏と夕顔（「なにがしの院」）、同浮舟巻の匂宮と浮舟（「時方が叔父の因幡の守なるが領する庄にはかなう造りたる家」）、あるいは河原院の宇多院と京極御息所、伊勢物語の芥川の段

（六）がひびく。一話は、事情を知らぬその家の主から妻に内通する男と誤認されてあやうく討たれそうになった明衡が、「思かけぬさしぬきのくゝりの徳にけうの命をこそいき」たと展開し「かゝれば、人は、忍といひながら、あやしの所には立よるまじきなり。」と結ばれる。同話を収める今昔物語集（巻二六四）はこの後に「宿世ノ報」を説いて明衡の存命への解釈を示していた。これとの比較において、「あやしの所」での逢瀬に焦点を絞る宇治拾遺話の話末が注意されよう。夕顔巻では六条御息所の生霊が襲い、浮舟巻でも、宿主は「時方を主と思ひてかしづきあり」く誤認を犯す。「喚び起こされるもの」の特定はむつかしいが、作り物語に頻用される設定との類似は相応のイメージを導き、展開は「すきもの」の難を語って作り物語と現実の恋との差異（夕顔―生霊と亭主、浮舟―密会の成功と失敗）を描きだす。第一九〇話「土佐判官代通清、人違シテ関白殿ニ奉逢事」は、

歌をよみ、源氏・狭衣などをうかべ、花の下・月の前とすきありきけり。

と紹介される「すきもの」通清の「すこしをこにもありける」様を語ったもの。同一話題を引く十訓抄一43は、この前に、同じ道清の「所ノ景氣ニモ似ザリツル女房振舞」に萎縮し「色好タツルホドノ男ノアリヤウトモ覚エ」ぬ失態

を演じた話題をも示すが、その冒頭には、^{注47}

土佐判官代道清ト云者アリケリ。源氏・狭衣タテヌキ
ニ覚エ、歌ヨミ連歌ヲ好テ、花ノモト・月ノ前スキア
リキケリ。色好ニテ、然ベキ宮原ノ女房シラヌナク、
立ズミアリケケリ。

とある。宇治拾遺話冒頭との類似は、宇治拾遺にとってもこの十訓抄前段話題が視野に入っていたことを思わせる。道清が誘われた逢瀬の場は御堂で、そこは女房の仕えていた主人の病平癒を祈るとおぼしい僧が経を誦する所でもあったが、これは宇治拾遺本話と第一九一話との連関を説明しよう。それはともかく、かような、平中を想わせる（宇治拾遺第五〇話。宇津保物語藤原の君巻の平中納言も）「歌」「源氏・狭衣」「連歌」を嗜む「すきもの」の失敗譚が、作り物語の色好み主人公の姿を「喚び起こされるもの」として表現の前提にしていることは、あらためて述べるまでもないことだろう。

こうして、宇治拾遺物語は、「喚び起こされるもの」として様々な表現世界を要請し、それらの参加が果たされるところに表現を成立させている。伝承世界、漢文体の記録、和歌世界、作り物語。これらの諸ジャンルの、表現への参加の様態は、宇治拾遺表現主体のジャンル性に関する認識といったことを窺わせましょう。昔話の模倣（第三話「鬼

ニ瘰被取事」、第四八「雀報恩事」）については既に指摘されているが、作品が前提とするのは昔話にかぎらなかつた。また、文体は口語り文体から書記文体（和文・漢文）までにわたる。したがって、近年注目される言語遊戯も、宇治拾遺の語りの特徴には相違ないが、それは宇治拾遺に固有のものというのではなく、既に手法化されていたもの（古くは竹取物語にも事例はあったし、和歌の掛詞・縁語あるいは俳諧歌もこれにかかわっていよう。）を語りの方法の一つとして採用したものと見なすべきで、このことは、様々な言語遊戯をもってなる第二三話の語りが今昔二八30のものでもあったことよって明らかである。

既成の表現世界への理解に基づき、これを「喚び起こされるもの」として仕掛け、差異を仕組んで表現を成立させる宇治拾遺物語。そこには、この作品の表現位相もみえていよう。

七 宇治拾遺物語の表現位相―結びにかえて―

以上、宇治拾遺物語の表現位相をもとめて「表現の成立するところ」に注目し、既成の表現世界を「喚び起こされるもの」として仕掛け、それらの参加が果たされるところに表現を成立させる有り様を概観してきた。それは、享受者のさまざまな働き掛けによって物語空間を開くこの作品

において、この働き掛けの一つに既成の表現世界の想起があったことをあらためて確認させる。「開かれた作品」——しかし、別稿^{注48}でも述べたように、作品の表現を開くものが作品の要請する享受者の働き掛けであってみれば、要請される働き掛けをなしえない享受者にとって、作品は開かれていない。そのような享受者にも相應の「読み」を導く作品の表現の有り様に、多元的な表現性を指摘することはできるけれども、宇治拾遺固有の表現が成立するところに立つかぎり、かような作品の開かれ方は「閉ざされた作品世界」との認定を促す。おそらく、この「開かれた作品」が閉ざされる地点に、作品の表現位相は顕在化する。宇治拾遺の場合、表現を開く鍵の一つが「喚び起こされるもの」として仕掛けられた上述の既成の表現世界であるとすれば、作品は、それを共有する人々を享受者に想定し、またそれらの享受者と共にかような既成の表現世界につらなることになるだろう。

もちろん、宇治拾遺の表現位相の認定にとって重要なのは、既成の表現世界、つまりは表現の伝統につらなること自体ではなく、そのつらなり方にちがいない。喚び起こされる既成の表現世界は、叙述の表層が辿らせる表現に重なりながらも、結局のところ対照をへて差異だけを際立たせる。そして、差異が表現に機能する局面は、見たよ

うに、一方がつねに他方を相対化し批評するといった固定した有り様を示していない。「読者を眩惑し、はぐらかし、煙にまく、したたかな語り」⁴⁹。したがって、際立てられた差異は、その関係の不確定性をもって享受者をテキストへの能動的な関与に駆り立て、表現は、「喚び起こされるもの」と表層の表現とを往還する享受者の「読み」のうち成立する。すなわち、宇治拾遺は、表現の伝統に差異をもってつらなり、この差異化によってこそ固有の表現性を導いていたということになる。

表現の伝統に差異をもってつらなる、といえば、これと同じ有り様を示す作品として堤中納言物語が思い起こされる。先行物語作品の表現世界を駆使して織り上げられるテキスト。しかしここでも「喚び起こされる」物語との間に差異は仕組まれていた。「桜花折る少将（中将）」は、冒頭に源氏物語蓬生巻を導きつつも「いみじう兎めい」たる「らうたき」姫君を描いて源氏と共に末摘花の鼻を笑った若紫を重ねさせ、更に、姫君を盗む謀略を語って少将に源氏の面影を見せかけながらも尼君を盗ませる。源氏が「木立いとものふりて、木ぐらう見えたる」「蓬生」の六条京極の邸から若紫を連れ出すのは若紫祖母の尼上の死後のことだが、ここに仕組まれた差異は享受者の想像力を刺激して、仮想の源氏物語（尼君が生きていたら……）をこの作

品に見出させることとなる。また、「はいずみ」は、二人妻の話型（伊勢物語第23段・大和物語第149・157・158段―天福本系統―など）への解釈に描写を増幅させ、男と古妻との関係回復の過程を描き込むことで「情有ル」男に話題の焦点を結ぶ古物語・伝承（今昔物語集三〇101112）とは異なる物語世界を構築し、さらに古妻と今妻との対立の構図を古妻と今妻の親との対立へと組み直す。そこでは、享受者は、話型と同様の今妻を笑う視線を平中墨塗説話との類比を導く「目のきろきろ」としてまたたき居「たる姿に確認しながら、一方で、古物語・伝承との対照が見出させる差異に、財力にまかせて強引な要求を突き付ける親へ向けられた視線を発見し、「読み」を複線化することとなる。そして「蝶めづる姫君の住みたまふかたはら」の「虫めづる姫君」の物語。かようにして、堤中納言物語の諸作品は、「喚び起こされるもの」として仕組まれた既成の表現世界に差異をもってつらなり、両者の間を往還する「読み」を介して表現を成立させている。「虫めづる姫君」の語りに見出される言立てのおかしみ、あるいは収載作品に特徴的な、結末を享受者の想像・判断に委ねる物語の結び方、また男主人公の職名類似を仕組んで収載物語相互の関係付けを促す^{注49}など、宇治拾遺に通じていよう。宇治拾遺は、それらの相同性の確認のうちに、表現の位相を、堤中納言物

語とともにするものとする^{注50}ことができる。

＊

ところで、宇治拾遺物語の表現位相を、このようにして堤中納言物語との相同性のうちに確かめるとき、宇治拾遺において「喚び起こされるもの」としてある既成の表現世界は、堤中納言物語の場合が^{注51}そうであるように、作品テキストに対するプレテキストの位置にあることになる。説話における引用の問題は、作り物語との異なりを明らかにしながら注意深く考察されなくてはならない重要な課題だが、宇治拾遺のそれは、既成の表現世界に関する理解に基づいた意識的なもので、その意味で手法化されたものとみなすことができる。引用において、「物語の側は、物語の持つ^{プレテキスト}論理で^{プレテキスト}ばを染めあげ、^{テキスト}表現の狭間^{プレテキスト}にからめとろう」とし、あるいは「引用するもの^{テキスト}とされるものとの交響作用により、多義的表現をもたらし」、^{プレテキスト}それだけではなく、「引かれること^{プレテキスト}ばのもたらす物語性を異化するという、批評性を物語内に醸成させる」という^{注52}。喚び起こされる既成の表現世界を、表層の叙述が辿らせる表現に重ねさせながら、対照に差異をこそ際立たせる宇治拾遺。この作品の場合、引用は多義的表現を導き、テキスト・プレテキストが相互に異化される^{注53}というべきか。小論のみた事例でいえば、第二

○話は喚び起こされる祈雨法験譚をテキストが相対化し、第一七・一八話は、喚び起こされた蘇生譚・異界訪問譚が表層の話題性を相対化していた。第一九〇話などの「すき者のおこ」を語る話題は、作り物語の世界との対照に「すき」を気取るものの「おこ」ぶりを際立て、また逆に作り物語世界の「すき」に内在する「おこ」性に目を向けさせもする。

作品が表現に仕組む差異は、したがって相対化は、引用の手法にもかかわっていた。「引用の手法にも」といったのは、従来、かような宇治拾遺の相対化の手法が、実体的な「巡り物語」との関連で説明されてきたからである。小論で見たように、話題への相対化は排列や作品内の話題連関によってのみ果たされているわけではなかった。そして、表現の位相に近い点が見出される堤中納言物語、またこれを含めた平安後期から鎌倉期の物語、或は、いささか粗い物言いになることを承知の上でいえば、和歌における本歌・本説、漢詩文の故事典故、軍記歴史物語の故事・説話の引用などを含めた、表現世界における手法としての引用の実際をも視野に入れるならば、相対化はそこでも成立し、すでに成熟していたのである。

ことごとしく「引用」などという語を用いるまでもないのかも知れない。「喚び起こされるもの」——中世説話の

表現世界において、話題はいつも別の話題を喚び起こす。

中世説話の読みと表現において、説話主体の「想起（連想）」を内容とする営みは、もっとも主要なものとしてあったというべきである。^{注53}それは、十訓抄の、作品の文脈を裏切って話題が「つらねられる状態に明らかだ。また、たとえば閑居友（上15）で、話題の主の住みかが「駿河の国、宇津の山」とあるのに事寄せて伊勢物語第九段を喚び起こしているところにも確かめられよう。そして想起された話題は対照をへて差異を発見させ、相対化を促す。

昔見し人も、さだめてあひけむものを、おもひおくふしなくば、消息する事もあらじとあはれ也。^{注54}

この慶政の想像は、想起された伊勢物語話との対照に、昔男と異なる「おもひおくふし」なき話題の主の姿を推量したものにほかならない。

相対化の視線の成立、それは「場」をかならずしも要件としない。すなわち宇治拾遺の「複眼化」した視線の形成は、△巡り物語▽の場を持ち出すまでもなく、この作品に近い位相にある表現世界での引用の手法、中世説話の読みと表現の形態によっても説明しうるものとしてあった。

このことは、宇治拾遺物語と△巡り物語▽の場との関係について、従来とは異なる見方を導くであろう。この作品が△巡り物語▽の場とかかわりをもつことは疑えない。し

かし、そのかわり方は、場の作品化、つまり実体的な場を模倣したり仮構したりすることで、そこに成立している表現性を再現するといったものではない。^{注55}むしろ、作品の志向する表現性の成立は、△巡り物語▽の場の設定に先行する。とすれば、△巡り物語▽の場は、逆に、この目指される表現性の実現にむけて利用された方法、すなわち、作品外からの「喚び起こし」、作品内における話題の関係付けとともにある宇治拾遺の方法の一つとして、特にその場の機構の側面が、作品の表現に利用されたものとすべきだろう。そして、序文は、宇治大納言物語の成立経緯を語って実体的な△巡り物語▽の場を喚び起こし、方法化された機構の認知をあらかじめ促しておくことで享受者の能動的な「読み」を導く、そのような装置として機能させるべく用意されたものと見なされる。^{注56}

＊

宇治拾遺物語の表現位相を明らかにすることは容易ではない。小論は、「喚び起こされるもの」としてあった既成の表現世界に着目し、これが表現の成立するところに機能する側面をとりあげること、その一面を窺おうとしたものだが、個別性だけが強調されてきたこの作品の表現性を相対化するためには、なお周到な考察が求められよう。宇

治拾遺の視野にある表現世界は広く、仕組まれる差異はこれら一つ一つへの理解に基づいている。既成の表現世界に差異をもってつらなる様態は、たしかに「作者の批評精神」を窺わせ、△もどき▽「パロディ」への志向を思わせもする。しかし、差異の表現へのかかわり方は一様ではない。差異を仕掛ける「複眼的な視点」が価値の相対化を前提としていることはもちろんだが、これを「批評精神」△もどき▽「パロディ」と名付けうるほどには視線は固定されておらず、むしろ作品は自己確定を保留しつつづけていくかのようにさえ見える。しかも、相対化は宇治拾遺に限らない。宇治拾遺とは、相対化を目的化したような表現世界の形成を背景に、多線化した意味の系列を上述の手法をもって作品に仕掛け、意味系列間の懸隔、つまり差異を往還する「読み」とその興趣をこそ物語空間に実現しようとしたものではなかったか。^{注57}その検証は容易ではないが、ともあれ、名付けに作品論を方向付ける前に、宇治拾遺における既成の表現世界についての理解の内実と差異化の実際を見きわめる必要がある。そして、一方で表現一般の時空軸に指標を刻み付け、そこに作品を位置付けていくこと。^{注58}小論では扱う機会を得られなかったが、明月記等に確かめられる中世初頭の連歌（短連歌・鎖連歌）の盛行は、表現における差異化、相対化を考える上で見逃しがたいもの

ひとつであろう。宇治拾遺物語の位相を見定める上で、なすべきことは多い。

注

- 1 佐藤晃氏①「『宇治拾遺物語』の和歌説話―主題の相互関連性の視点から―」(『日本文芸論叢』2、昭和五八年三月)
 - ②「『宇治拾遺物語』の説話配列における表現方法」(『日本文芸論叢』3、昭和五九年三月)
 - ③「『宇治拾遺物語』における言語遊戯と表現」(『日本文芸論叢』4、昭和六〇年三月)
 - ④「『宇治拾遺物語』第五七話の形成―説話形成論の試み―」(『説話と思想・社会』昭和六二年四月、桜楓社)
 - ⑤「『宇治拾遺物語』の表現機構」(『中世文学』32、昭和六二年五月)
 - ⑥「演ずる主体―『宇治拾遺物語』の表現機構―」(『文芸研究』119、昭和六三年九月)
- 荒木浩氏①「異国へ渡る人々―宇治拾遺物語論序説―」(『国語国文』昭和六一年一月)- ②「宇治拾遺物語の時間」(『中世文学』33、昭和六三年六月)
- 小峯和明氏①「『宇治拾遺物語』と昔話―隣の翁型を読む―」(『説話と思想・社会』昭和六二年四月、桜楓社)
- ②「世俗説話集の語り―宇治拾遺物語を中心に―」(『日本文学講座』3、神話説話』昭和六二年四月、大修館書店)
- ③「宇治拾遺物語の△宇治▽の時空―序文再考―」(『日本文学』昭和六三年六月)
- ④「宇治拾遺物語の表現時空―ひしめくもの―」(『国文学研究資料館紀要』15、平成元年三月)
- ⑤「宇治拾遺物語と△猿楽▽」(『語りと古層―伝承史の中世―』未刊、桜楓社。原稿によった)
- ⑥「宇治拾遺物語論―八もどき▽の文芸」(『国文学研究資料館紀要』16、平成二年三月)

森正人氏①「場の物語としての宇治拾遺物語」(『日本文学』昭和六二年二月)

文学』昭和六二年二月)・②「宇治拾遺物語の本文と読書行為」(『日本の文学』5、平成元年五月)- ③「宇治拾遺物語の言語遊戯」(『文学』平成元年八月)

この四氏の論考のほかにも、山岡敬和氏①「聖と俗への志向―宇治拾遺物語編者の採録意識をめぐって―」(『国学院雑誌』昭和五九年三月)- ②「宇治拾遺物語序文考―宇治をめぐる夢想―」(『国学院雑誌』昭和六三年一〇月)、稲垣泰一氏「宇治拾遺物語の表現」(『説話』8、昭和六三年六月)など取り上げるべきものは多いが、今、上掲四氏にかぎって行論する。

2 注1、佐藤晃氏③⑤論文。

3 注1、荒木浩氏②論文

4 その全体は、小峯和明氏『今昔物語の形成と構造』(昭和六〇年一月、笠間書院)・森正人氏『今昔物語集の生成』(昭和六一年二月、和泉書院)としてまとめられている。

5 室井尚氏「『読書』という物語―構造と読者―」(『美学』136、昭和五九年三月)に整理されている。

6 「文学」昭和四一年一二月。

7 なお、同氏「芋粥」の位置―『宇治拾遺物語』の作者像―(『日本文学誌要』27、昭和五七年一二月)では、「わたくし開の仕方は、当時の口で語られた説話の△巡り話▽の形式にかかわっており、その影響を受けている、と考えている。」と述べ、その後、「宇治拾遺の」構造は、人から人へ、話し手、発想をかえての語りつぎのおもしろさを、独りで演じていったもの」との見解が示されている。

8 西原和美氏「『宇治拾遺物語』の説話空間」(『国語国文学研究』6、昭和四六年四月)、三木紀人氏①「背後の貴種たち―宇治拾遺物語第一〇話とその前後―」(『成蹊国文』7、昭和四九年二月)・②「説話の霊鬼―源光の「勝利」など―」

- (『国文学』昭和四九年八月)・③「無名人への眼―女二人」の物語―(『国文学』昭和五九年七月)、宮田匡子氏「宇治拾遺物語―構成とその世界―」(『国語国文』昭和四九年二月)、小出素子氏「『宇治拾遺物語』の説話配列について―全巻にわたる連関表示の試み―」(『平安文学研究』67、昭和五七年六月)、西尾光一氏「『宇治拾遺物語』における連纂の文学」(『清泉女子大学紀要』31、昭和五八年一二月)。
- 9 矢吹重政氏「宇治拾遺物語に於ける説話配列の方式」(『国文学』9、昭和一五年三月)、日本古典文学大系『宇治拾遺物語』解説(渡辺綱也・西尾光一両氏、昭和三五年五月)、山田忠雄氏「目に見えぬ緯」(『日本古典文学大系月報』65、昭和三八年三月)。
- 10 『今昔物語集成立考』(昭和三七年五月、早稲田大学出版部。増補版、昭和五三年五月)。
- 11 注8、三木紀人氏論文。
- 12 山岡敬和氏「宇治拾遺物語成立試論―冒頭語の考察を中心にして―」(『国学院雑誌』昭和五七年九月)、「宇治拾遺物語増補試論―冒頭語による古事談・十訓抄関係説話の考察―」(『国学院雑誌』昭和五八年一月)。
- 13 注1、小峯和明氏⑥論文
- 14 益田勝実氏「話の生態」(『解釈と鑑賞』昭和三四年六月)・「貴族社会の説話と説話文学」(『解釈と鑑賞』昭和四〇年二月)・「古事談鑑賞」(『解釈と鑑賞』昭和四〇年五月から昭和四一年四月まで)・「言談の風景―説話文学会九月例会―」(『説話文学研究』15、昭和五五年六月)・「江談抄」と『古事談』(『説話文学研究』17、昭和五七年六月)のほか、池上洵一氏「読書と談話―九条兼実の場合―」(『日本文学』昭和五五年一二月)・「話題の連関―『中外抄』『富家語』私記―」(『甲南国文』29、昭和五七年三月)・「口承説話における場と

話題の関係―『玉葉』の記事から―」(『語文』43、昭和五九年六月)・「貴族日記における説話の方法―興定め―」のことなど―(『中世説話とその周辺』昭和六二年一二月、明治書院)、田村憲治氏「明月記における言談―心寂房と定家―」(『芸文東海』12、昭和六三年一二月)・「古事談」の成立」(『中世文学研究』15、平成元年八月)などによっても説話集と言談の場とのかかわりが確かめられつつある。

- 15 注1、佐藤晃氏②論文。
- 16 注1、佐藤晃氏⑤論文。
- 17 注1、佐藤晃氏⑤論文。
- 18 注1、佐藤晃氏⑥論文。
- 19 注1、小峯和明氏⑤論文。
- 20 注1、小峯和明氏⑥論文。
- 21 注1、荒木浩氏②論文。
- 22 注1、森正人氏①②論文。
- 23 注1、荒木浩氏①論文。
- 24 注1、森正人氏②論文。
- 25 注1、森正人氏②論文。
- 26 作品の要請する「読み」を、荒木氏は「数多くの読みを繰り広げて派生した横糸を、宇治拾遺が提示する物語世界の流れのいくつかの縦糸との交叉する点で把握していく」(注1①論文)こととし、森氏は、「意味了解の筋道」を「複雑化し重層」させ、「それ以前の読みが再認されるばかりでなく、すでに読み取った意味が後退し、別の意味がが現前したり、意味が転換したり、またそれらが交錯したり、きわめて複雑で動的なものになる」「たどりなおす読み」に認めている(注1②論文)。これらは「物語」である宇治拾遺に、作り物語の享受における読書行為の模式を適用しようとしたものと見受けられる。作品の表現位相を見定めるための試案として

確かに有効であろうが、宇治拾遺の「読みのしくみ」として認定しうるものかどうか、あるいはすべきかどうか、更なる検証を必要としよう。

27 注1、小峯和明氏⑤論文。

28 高橋貢氏「打聞集の説話伝承私考」(『平安文学研究』9、昭和三八年九月)、大森郁之助氏「打聞集第四話私注―古代仏法祈雨譚に於ける或る下絵の発掘―」(『国学院雑誌』昭和三九年四月)、黒部通善氏「『打聞集』所収「静観僧正説話」考―説話の生成と変容について―」(『同朋大学論叢』2425合併号、昭和四六年六月。のち同氏「説話の生成と変容についての研究」第二章第一節「昭和五七年三月、中部日本教育文化会―に再録」、中野猛氏「静観僧正事―真言の験を中心に―」(『打聞集―本文と研究』昭和四六年八月、笠間書院)。

また、宇治拾遺第二話を取り上げて静観を論じたものに、尾崎勇氏「『宇治拾遺物語』卷二の三「静観僧正大嶽の岩祈り失ふ事」の成立」(『龍谷大学国文学論叢』27、昭和五七年三月)がある。

29 注28、大森郁之助氏論文。

30 引用は、東辻保和氏「打聞集の研究と総索引」(昭和五六年一月、清文堂)による。以下、同。

31 注1、小峯和明氏⑥論文の注19に清徳聖の行為を「餓鬼達を救済する慈悲業の体現」とする見方が示されている。従うべきであろう。

32 引用は、日本古典文学大系本による。分かち書きは一行に改めた。以下、同。

33 引用は、古典資料類従6(昭和五二年四月、勉誠社)による。

34 宇治拾遺は「上達部の御前は美福門よりのぞく。かくのごとくみる程に、其雲むらなく……」とし、打聞集は「他僧共

ハ経ヲ読了テ、此律師ノカウテ立ヲ集テマモル。……諸衛ハ、春花門ヨリノゾク。如是見程ニ、此律師持テ立ル香炉之煙、ス、ニ上ザマニ登レ立ル。」とある。美福門から南殿近辺がみえる筈もなく、宇治拾遺はむしろ神泉苑に近い美福門を示して、神泉苑の竜の昇天に注目する人々を描いているとみる。功験としての竜は神泉苑からの昇天がふさわしいだろう。

(江談抄一17「大僧都空海、一七箇日不雨降、延二箇日。九箇日、竜破神泉苑上天。即降雨、天下潤沢。」、祈雨日記―後朱雀院御宇・長久五年六月六日条―「小野僧正請雨経法。金色竜出神泉昇天。見者悶絶。……江帥記云々」。また、祈雨日記(統群書類従75)によれば、「屈六十僧、於大極殿限三箇日転読大般若経。又屈神泉苑修大雲輪請雨経法。並祈雨也。」(清和天皇・貞観十七年六月十七日条)など、大内裏(内裏)と神泉苑とで並行して祈請する場面が多い。なお、本話題で竜が描かれることは、次話との関連で興味深いが行論の混雑をおそれて今省き、拙稿「封じられた龍―同行論(静観)僧正、大嶽ノ岩祈失事―」(『香椎瀉』36、平成二年一〇月)で扱った。

35 注28、大森郁之助氏論文。

36 田口和夫氏「『宇治拾遺物語』「龍門聖」説話と照射獵―『古事談』「舜見上人」の由来―」(『説話』8、昭和六三年六月)。

37 谷口耕一氏「仲胤と俊貞と法性寺殿と―宇治拾遺物語の成立事情について」(『語文論叢』1、昭和四七年三月)・「宇治拾遺物語における仲胤僧都の位置」(『中世文学』19、昭和四九年八月)。森正人氏、注1②論文。

38 「かしらおつかみ」の語例は、古事談(二二七)・今物語17及び日葡辞典など。頭髮ののびた風体あやしげな僧の形容に用いられる。

39 注8、小出素子氏論文。なお、一八話は今昔物語集二六17にも見えているが、宇治拾遺では一七話に続くことによって異界訪問譚としての読みが方向付けられているとすることができるだろう。

40 注8、三木紀人氏論文、上岡勇司氏「秦兼方とその和歌說話に關す考察―宇治拾遺の説話から―」（『北海道教育大学・語学文学』13、昭和五〇年三月）、中世の文学『今物語・隆房集・東斎隨筆』解説（松尾葦江氏執筆、昭和五四年五月、三弥井書店）など。

41 小沢正夫氏他三氏『袋草紙注釈』（上巻昭和四九年三月・下巻昭和五一年三月、塙書房）の段数による。

42 撰集抄話（八20、略本系統にはなし）は、いくつかの点で他話と異なっている。兼方が批判する相手を藤原俊成とし、兼方の偲ぶ人物も待賢門院となっているなどがそれだが、なかでもここに引く末尾の「但し、中納言難じ給へるは」以下、俊成の批判の真意を解説する叙述は独自のものである。この「中納言」は、文脈上俊成と考えるのが適當だろうが、俊成任中納言の事実はなく、定家のことも見なしうる。なお、撰集抄本文の引用は安田孝子氏他四氏『撰集抄―校本編―』（昭和五四年一二月、笠間書院）によった。

43 藤原通俊は、本朝世紀（二二堀河天皇・康和元年八月一六日条薨伝）に「通俊才兼和漢、深達政理」と評され、続古事談（臣節二13）にもその才（記憶力）を大江匡房と並べて賞賛する記述が見えている。これらの人物評、或いは歌病の指摘に「ける」（公任歌）を加えている点からすれば、兼方の反証は通俊のよく知るところであったとも読み取られ、ここは、その上で兼方歌を退けた通俊が、逆上する兼方を笑っている場面との理解も可能であろう。

44 浅見和彦氏「小式部内侍説話考―古事談・宇治拾遺物語所

載説話を中心に―」（『成蹊国文』22、平成元年三月）。

45 三木紀人氏「宇治拾遺物語を読む」（別冊国文学『今昔物語集・宇治拾遺物語必携』（昭和六三年一月））。

46 注1、小峯和明氏⑥論文。

47 十訓抄本文の引用は泉基博氏「十訓抄―本文と索引―」（昭和五七年一二月、笠間書院）による。

48 拙稿「今物語の表現性」（『香椎瀉』35、平成二年三月）。

49 各物語間の関係付けは、稲賀敬二氏「解説―『堤中納言物語』の成立の謎をとく―」（完訳日本の古典『堤中納言物語・無名草子』昭和六二年一月、小学館）の五にも一解が示されている。

50 注1、小峯和明氏⑥論文にも、△もどき▽の観点の有効性を確認する文脈で、堤中納言物語における△もどき▽の方法化が取り上げられている。

51 三谷邦明氏「落窪物語・堤中納言物語研究の展望」（『日本文学研究資料叢書』『平安朝物語Ⅲ』解説、昭和五四年一〇月、有精堂）

52 井上真弓氏「狭衣物語」の「天照神」表現を読む」（『物語研究』特集・語りそして引用▽）所収、昭和六一年四月、新時代社）。

53 拙稿「中世説話の表現形成―説話主体の読みと表現―」（上『香椎瀉』34、昭和六三年九月。下『文芸と思想』53、平成元年二月）。

54 引用は、美濃部重克氏『閑居友』（昭和五四年五月、三弥井書店）による。

55 このような宇治拾遺と「巡り物語」との関係を、かつて「場の消去」として考えたことがある（『物語の場としての説話集―語りの空間から読みの空間へ―』（『日本文学』昭和六二年二月）。しかし、さような見方は、なお宇治拾遺の表現

性の形成を「物語の場」に由来するものとする判断にしたがうもので、小論のいう、場に先行する表現志向の成立との観点からすれば、訂正を必要としよう。表現性の形成は、「物語の場」に由来しない。したがって「消去」される「場」もない。あるのは作品に先行する表現性への志向であり、宇治拾遺はその実現に向けて、「巡り物語」における相対化の機構を利用してゐる。ただ、それは、実体的な場の表現性を作品化したものとする、すなわち、宇治拾遺を「場の物語」と認定することと同じではない。

- 56 宇治拾遺物語の序文については、注1、森正人氏①②論文、小峯和明氏③論文、山岡敬和氏④論文に詳しい。そこにも整理されるとおり、序文の成立には、擬作説（島津忠夫氏「宇治拾遺物語の序文」〔《中世文学》28、昭和五八年一〇月〕、偽作説（吉田幸一氏「宇治拾遺物語」序文偽撰考）〔《古典聚英》3「宇治大納言物語」伊達本、昭和六〇年、古典文庫〕がある。稿者は擬作説につくが、偽作説の場合は、作品の表現機構に「巡り物語」場と同様の様態を認めた偽作者によって、序文がものされたことになる。なお、深沢徹氏「散佚『宇治大納言物語』の幻影（上・下）」〔《立教大学日本文学》40・41、昭和五三年七月・昭和五四年一月〕参看。
- 57 注55拙稿でも述べたことがある。
- 58 注1、小峯和明氏⑤⑥論文は、この点で、明確な指標の一つを刻んだものとみなされる。

※小論における宇治拾遺物語の本文引用は桜井光昭氏『三本対照 宇治拾遺物語』（平成元年六月、武蔵野書院）によった。

◇小論は、平成元年度文部省科学研究費（奨励研究A）による研究成果の一部をなすものである。

（平成二年二月稿）

（追記）

◆小論は和泉書院刊『日本の文学・変容と伝統』5のために執筆し投稿していたものだが、編者の御許しを得て本誌に発表することとした。注3448に示した拙論で注に引いた「宇治拾遺物語の位置」は本稿のことである。

（平成二年一月記）